

本の紹介

誰も知らないロシア

～若手外交官が見た隣国の素顔



石川 知仁著

彩流社

定価 3250 円 (税込)

四六判 450 頁

本書は、現役の外交官である著者が、主に 2018 年から 2023 年にかけてロシアに住んだ際に見聞きし、体験したことをまとめた書籍である。

本書を読み始めてすぐに湧き起こってきた感情は、「くやしい」であった。ねたましいとも思った。私がこれまでの人生で重ねてきたロシアの知識、経験が、本書の 30% くらいまでしか通用しなかったからだ。しかし、負け惜しみを言うならば、誰も 100% を達成することはできないだろう。本書はそのくらい博覧強記でものしてある。と同時に、何よりも、猛烈に新しい。冒頭に紹介した通り、だいたい 2023 年くらいまでのロシアの社会が詰め込んであるのだ。

本書はその新しさでもって、今のところ誰も追いつけない高みにある。でも決して、速報レポートのような素材の羅列にとどまっていない。どの時代を映すトピックも、先行研究の豊富な前世紀のソ連文化のそれと遜色ない濃度で抽出してあって、新鮮なのに熟成の域にある。その文章はまさに現代ロシアのエッセンスだ。今これと同じことを、同じ深さ、広さで書ける日本人がいるだろうか。いや、ロシア人でもまずいるまい。

本書はトレチャコフ美術館の「ヴルーベリの間」から始まる。そしてそこにある絵画作品の「デーモン」をひも解き始める。この演出がどれほど心憎いものであるか、モスクワに暮らした経験がある人ならばこの時点できっとわかるだろう。

トレチャコフ美術館は観光ガイドブックで必ず紹介される有名な美術館（ガレリヤ）である。一方、ヴルーベリという画家の知名度は日本ではそれほど高くない。だが、実際にトレチャコフ美術館を訪れた人が十中八九、最も強く心に刻みつけて帰ってくるのは、そのヴルーベリなのだ。なかんずく、大作『座るデーモン』は、その日それ以外に見たものの記憶が吹き飛ぶほどの怪作である。知らずに行った者はしばらくその場を動けない。行った人ならわかるあの衝撃を、読

者と共有するところから本書は始まる。つかみが素晴らしすぎるのではないか。

ここから続く第一部は、演劇、音楽、映画など、ロシア理解に欠かせない芸術文化が怒涛のように読者の頭に流れ込んでくるのだが、驚いたことに、そのどれもこれも明らかに著者が“ガチ勢”として嗜んだものばかりで、どれ一つ“ニワカ”なものがない。

例えば音楽ならば、著者はまずソ連期の伝説的ロックグループ КИНО（キノ）との出会いを出発点として、次に伝統楽器の「ガルモニ」を購入、先生について演奏を習得したかと思うと、現代ロシアを最もよく映している音楽ジャンルはラップである、と話を展開し始め、そしてかなりのページ数を、ロシアの偉大なラッパーの紹介と、その社会的な影響力や存在感の論考に割く、といった調子である。無理やり日本に当てはめれば、三味線を習うところから始めて、最後はボカロ P の詳細な系譜をまとめ上げるような仕事だ。普通はこれだけで本 1 冊になる。

芸術文化に続く第二部はロシアの生活文化の紹介である。果たしてロシア人はどんな家に住み、どんなものを食べ、どんな祝日をどんな作法で祝うのか、そしてどんな場面にどんな悪態がふさわしいのか、つまり“ロシア人はどう生きているのか”に肉薄する、本書の核心部だ。

ここでも著者は無類の行動力を見せる。外国人はもちろん、ひょっとするとロシア人でもそこまではやらないような、本物の体験を求めて果敢に飛び込んでいく。

圧巻は「本物のマースレニツァ（謝肉祭）」の体験記だ。都会の商業ずれたマースレニツァイベントに物足りなさを感じていた著者は、郊外の森の中でひそかに開催されているという「本物の」マースレニツァへ友人たちと参加する。そこで彼らは「スチェンカ・ナ・スチェンク」（「壁対壁」と呼ばれる集団拳闘）や、寸劇仕立ての模擬戦争の砦攻略作戦などの危険な格闘に巻き込まれながらも、かろうじて生還する、という体を張ったエピソードだ。

「スチェンカ…」については、日本でも『ゴールデンカムイ』という漫画作品で取り上げられたこともあって、近年日本での知名度が急上昇した。しかしやってみた人はいるだろうか。あのような荒っぽい殴り合いのイベントに著者は実際に参加したのだ。冗談ではなく命をかけている。こんな具合なので、本書の第二部はすさまじい読み応えで、読むほどに、「隣国ロシアを誰も知らない」というタイトルが輝いて見える。

著者の筆の向かう先は、自由闊達にして縦横無尽だ。だから、何らかのロシア経験のある読者は誰でも、どこかに刺さるエピソードがある。「そうそう！」と膝を打つ箇所が必ずある。しかし一瞬の共感はすぐに戸惑いに変わっていく。どれも、思ったより話のレベルが高いからだ。そして、自分が人

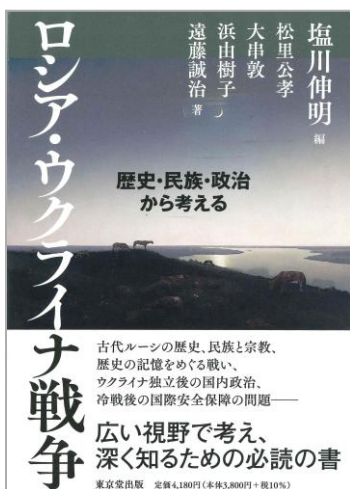
生に編み込んできたロシアが、一旦ほどかれて、もう一度編み直されるような感覚がしてくる。しかも、拾い忘れたままになっていた編み目がちゃんとすくわれて、整然と並び始める。これは自分がいかに表面的にしかわかっていなかったかを突きつけられる苦しみであり、それ以上に快感だ。読者は抗えない。やっぱりくやしい。

本書のような、新しく、勢いがあって、それでいて緻密な著作を、一人の現役の外交官が、単著で出したことに、私は日本の将来の希望を見る。そして、このような人材が途切れずに続くことを切に願う。だから、みんなロシアに行っていほしい。本書を読んで膝を打つような体験を、できるだけ多くの人にしていほしい。あのやっかいな隣国を、いろいろな人が、さまざまな角度から見、聞き、そして伝えてほしい。いまロシアへ行くのをためらわないでほしい。

人生のどこかにロシアがある、すべての人の必読書である。
岡本 健裕 (JIC 大阪)

ロシア・ウクライナ戦争

歴史・民族・政治から考える



塩川伸明 編
松里公孝・大串敦・浜由樹子・遠藤誠治 著
東京堂出版
定価 4180 円 (税込)
四六判 370 頁

本書は、開戦 1 年半後の 23 年 10 月に出版されたものだが、ロシア・ウクライナ戦争の背景を、歴史、民

族、政治、国際関係からバランスよく解説している。かわさき市民アカデミーでの講義をもとに書き上げられた論文集であることから、専門的な内容が比較的平易な文章で綴られており、大変読みやすく、かつレベルの高い一般参考書となっている。

本書は 5 本の論文で構成されている。第 1 章 総論～背景と展開 (塩川伸明)、第 2 章 ルーシの歴史とウクライナ (松里公孝)、第 3 章 現代ウクライナの政治～脆弱な中央政府・強靱な地方政府 (大串敦)、第 4 章「歴史」をめぐる相克～ロシア・ウクライナ戦争の一側面 (浜由樹子)、第 5 章 自由主義的国际秩序とロシア・ウクライナ戦争～正義と邪悪の二分法を超えて (遠藤誠治)。

総論では、冷戦終結後のロシア NATO 関係を押さえつつ、と

くに 2014 年「マイダン革命」から現在までのロシア・ウクライナ関係とウクライナの内政が整理されている。「マイダン革命」の経緯、クリミアとドンバスの動向、キーウ政権のアイデンティティ・ポリティクス、言語政策と対外政策の展開など、開戦に至る諸要因と主要な論点が提示される。

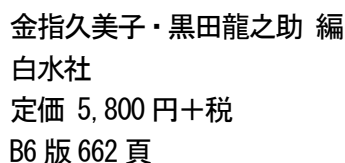
第 2 章では、9 世紀キエフ・ルーシ誕生から 20 世紀ソ連邦結成まで、ルーシ世界の形成・分裂・変容・再統一が、キリスト教世界をはじめとした外部世界との関係史の中で解説される。「ルーシの原型は、キエフ・ルーシとコンスタンチノープル世界総主教座管轄下のキエフ府主教座という聖俗権威のもとで形成された」、「キエフ・ルーシ以後の歴史は、ルーシ正教世界が他宗教・他宗派から侵略され、跳ね返す歴史として理解できる」。つまり、ルーシ人としてのアイデンティティは、「タタールのくびき」、「オスマン帝国」、カトリックや合同教会運動などを共通の敵とすることで育まれた。

「依然として言語と文化を共有するロシアとウクライナであるが、共通の敵を失ってしまった彼らが、再び共同体意識を持てるだろうか」と松里氏は問題提起する。

第 3 章では、ソ連崩壊後に独立した現代ウクライナのこの 30 年間の政治動向が分析される。独立後のウクライナ政治は、各地方で絶対的な力を持つ地方閥が、中央の座を巡って競争を繰り返す「求心的多頭競合体制」だった。しかし、2014 年の「マイダン革命」以降、ヤヌコヴィッチのドネツク閥が解体し、クリミアや東部地域を支持基盤とする地方閥も軒並み票田を失ったために、「求心的多頭競合体制」は解体し、代わって「中央・地方遊離型ポピュリスト体制」が登場した。この体制下では中央権力と地方権力の間に政治的亀裂があり、中央権力は有権者の支持を求めて場当たりの政策を実行するようになる。こうして、中央権力を握ったポロシェンコも、その後を襲ったゼレンスキーも、支持率が低下するたびに「反ロシアカード」を乱用するようになった。反ロシアカードの乱用は、ウクライナ社会の民族主義化の裏返しでもある。

第 4 章では、ソ連崩壊後のウクライナとロシアの間の歴史をめぐる紛争(=歴史像の差異の政治化)が取り上げられる。特に問題になるのは第二次世界大戦中のウクライナ・ナショナリストの評価で、ステパン・バンデラと彼が率いた「ウクライナ民族主義者組織 (OUN)」はウクライナとロシアの歴史認識問題が最も先鋭化するテーマである。ナチス・ドイツと協力してソ連と戦ったバンデラは反ユダヤ主義でも悪名高く、OUN はウクライナ、ベラルーシ、ポーランドでのユダヤ人大量虐殺に関与し、またポーランド人の虐殺をも行った。バンデラを「民族の英雄」と讃え、「記憶法」の制定で法的にこれを固定化しようとするウクライナ政権の動きは、ロシアのみならずポーランドや欧州近隣諸国にも波紋を広げている。

第 5 章は、グローバルな国際社会の中でウクライナ戦争を分析する論考である。「冷戦終結後、ロシアを自由主義的国际秩序に包摂することに失敗したことが、この戦争を引き起こ



二〇世紀ロシア文学の最高傑作の一つである本作品は、まるで今の時代のロシアを、そして世界を先取りしていたかのように、「臆病は最大の欠点のひとつである」、「原稿は燃えない」と人々を鼓舞している。